



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道で働き，暮らすということ
Author(s)	桜木，紫乃；SAKURAGI，Shino；斎藤，歩 他
Description	パネルディスカッション
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報，12，19-30
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89050
Type	departmental bulletin paper
File Information	REBN_12_019.pdf



＜パネルディスカッション＞

北海道で働き、暮らすということ

講演者 桜木 紫乃（作家）

講演者 斎藤 歩（劇作家・演出家・俳優）

講演者 保田 優衣（フリーランス）

コーディネーター 平本 健太（北海道大学大学院経済学研究院 教授）

平本：それでは、後半のパネルディスカッションということで、まず最初に前半のお話を受けてですが、桜木さんには、作家というのはどんな生活をしているのだろう、1日どれぐらい書いたり、取材はどうやっているのか、多分、多くの方がほとんどご存じないと思うので、そんな作家の暮らしというのをよろしければお話しいただけますか。

桜木：はい。夜、風呂に入って顔を洗い、ストレッチをやって寝ます。そして、朝、御飯を食べて、顔を洗わずに1日を過ごします。それで、一番原稿を書くのが乗ってくるのは午前中です。その午前中をいかに持続させるかが集中力との戦いなのですけども、せいぜいもって4時間なのです。

斎藤：立って書いているのでしょ、桜木さんは。

桜木：そうですね。

平本：立って書いているのですか？

桜木：腰を一回駄目にしてから、スタンディングデスクにパソコンを載せてやってたりもするのですが、まあ何とか4時間。いかにその乗っている午前中の勢いを延ばすかなのです。ですから、お昼御飯は2時になったり、とっても乗った時は3時になったりします。不規則といえば不規則なのですが。

平本：なるほど。ノルマというのはあるのですか。ご自身に対する。

桜木：最低1日5枚は書きたいです。

平本：5枚というのは、何文字になるのですか。

桜木：何文字？ごめんなさい、古い人間なもので。400字詰め原稿用紙で5枚です。

平本：400字で5枚。なるほど。

桜木：2,000字でお願いしますと言われて、それって400字詰めで何枚ですかと聞くぐらいです。

平本：ありがとうございます。なるほど。そういう生活なのですね。

桜木：ちょっとだらしない生活です。

平本：いえいえ。毎日午前中の4時間、5時間をきちっと維持しながら、すごいと思います。ありがとうございます。

歩さんにも同じようにお伺いします。俳優さん、それから演出家さん、劇作家さんの仕事というのはみなさんなかなか分らないと思うのです。舞台に立っていると、映画やドラマに出られ、その演技されている姿はイメージできるのですが、稽古であったり、演出であったりというのは一体どういうようなものなのか、あまり分からないので、もしよろしければ、ちょっとそこら辺の基礎編をお話しいただけますか。

斎藤：俳優としては、例えば映像の仕事なんかに出る時はほんとに不規則なんです。けっこう夜明け前に起きなきゃいけないことが多いです。夜明け前に起きて、マネージャーさんが迎えに来たり、自分で出かけたりするのです。日が出たらすぐ撮影をしたいわけじゃないです。

平本：そうですね。

斎藤：日のあるうちに外のシーンを撮りたい。ですから、割と夜明け前に出て、撮影がある時はけっこう寝不足になったりすることがあります。

札幌で芝居を作っている時、台本を書いている時、そういう時は夜はけっこう早く寝て、朝4時頃起きたりします。私も朝じゃないと書けないんです。それで、10時過ぎるといろんな電話がかかってきたりメールが来たりするじゃないですか。ですから、4、5時間が勝負なんです。朝って、いろんなことを考えずに割とピュアにその作品の中に入っていけて、そこで書けないと、午後になってくるといろんなことが押し寄せてきちゃって。

桜木：そうそう。

斎藤：ええ。全く書けないのです。なので、物を書いている時はとにかく早朝。あと、家族が起きてきたりするといろいろな面白いことが始まっちゃいますので、とにかく早朝にしています。

平本：なるほど。

斎藤：それで、演出をする時、舞台の稽古をしている時というのは、その時々のカンパニーによるのですけれども、私らが今やっているサイクルでは、午後2時にみんな集まってきて、大体7時、8時、9時、直前になると10時ぐらいまで稽古をずっとスタジオでやって、酒を飲んで帰るみたいな感じです。

平本：ありがとうございます。大学の先生も給料をもらっているの、サラリード・パーソンにはなかなか分からないような実態がよく分かりました。

保田さん、保田さんの働き方というのは先ほどプレゼンテーションの中で教えていただいたのですけれども、逆に、仕事と学び、仕事と学び、というのを繰り返しながら働くモードと学ぶモードをうまく転換させていますよね。働く時と学ぶ時で何か姿勢が違ったり、取り組み方が違ったりというのはあるのですか。

保田：私個人に関して言うとそれはなくて、例えば生活面でいくと、仕事にしても勉強にしても私は逆に夜型で、朝がとっても苦手なので、起きるのがそもそも10時とか、さっき8時から仕事していますなんて言いましたけど、実際は10時に起きることがざらで、起きてから、それこそ御飯も食わずに突っ走れるところまで突っ走るみたいな感じです。仕事をしている時と学びの時で生活スタイルは一緒というところですよ。

仕事も学びも同じなので、私は気になったらずっと突っ走って、そのことばかり続けてしまうので、仕事を数年やっているとまた学びたいモードになるのです。ですから、数年おきに仕事と学びの切り替えのタイミングがけっこうコンスタントにやってきて、一回切り替わったらまた遅めの朝から夜中までずっと没頭するみたいな感じです。

平本：なるほど。分かりました。多分、働いている人の多くが、自分の仕事の中でこういうことを学びたいとか、あるいは、もう1回大学院に入り直して少しレベルの高い勉強をしたいなと思うことがけっこう人生の中であると思うのですけれども、なかなか実現しませんよね。それは、今の仕事をどうしようとか、経済的な問題もあると思うのです。保田さんはそういうところはどうやってクリアされたのですか。

保田：経済的なところでいくと、最初の留学の時は、お恥ずかしい話、自力でどうにもならない部分もあって親に頭を下げたということもありました。2回目の大学院は、実はユニクロさんからフル・スカラーシップといって奨学金をいただく機会があったので、逆に言うとそのがあったから行けたみたいところは正直あります。

あと、私の場合は企業型の留学ではなく、全部ゼロベースで自分で考えてだったので、奨学金などを頼りにというところがありましたが、仕事から勉強を選ぶ時に逃げにならないようにするということはありました。仕事で留学した

いとか勉強し直したいといっても、今のキャリアを捨てるのは怖いみたいな相談を受けることもけっこう多いのですが、きちんと明確な目的がないと、どんなに勉強したいというマインドになっても、それが仕事からの逃げなのかどうかを自分で判断するフェーズがあって、学びを絶対に次にまた就職する時に生かすという覚悟が座らないと次に移行できないのではないのでしょうか。

平本：はい。どうもありがとうございます。

今日、前半でお三方にお話しいただいたのですが、それぞれの講演者のみなさまから、ほかの方のご報告に対して何か質問やコメントなどがあればいただきたいと思います。どなたでもけっこうです、誰々さんのこの話にこういう質問とか、ここの部分は私も共感してこうだったというのがもしあればお話してください。

斎藤：いいですか。

平本：歩さん、お願いします。

斎藤：保田さんは、北大に入って平本先生に出会われて、それで現在のような道に進まれたわけですが、高校時代からどんな将来像を描いていて、北大でどうフォーカスが定まったのか。なぜ北大の経済学部に入ったのか、経済学部で何に気づかれたのかということを知りたくなりました。

保田：北大からアパレルというのは割と異色だったのですけれども、そもそも中高がたまたま私服校だったのです。なので、中学・高校からまずファッションが好きといいますか、何がしかファッションに関わることをやりたいというのは10代からありました。

じゃあ何で北大なのかというところなのですが、服飾専門に行きたかったんです。ただ、弟もいたので道内国立しか無理だと。そういった家庭の事情もあって、親孝行も兼ねて、じゃあ道内国立で頑張ってみようかと。ただ、北海道は、例えば医大とか教育大とか商科大のように割と専門のところが多いイメージを勝手に持っていたので、やりたいことが「服好き」以外決

まっていなかったもので、もう少し将来の選択肢が広い総合大学がいい、みたいなところで北大を選びました。

平本先生のゼミを選んだのは服とはまた全然別の観点で、けっこう人との関わりに興味があったので、企業の中でも組織論につながるといことと、単純に平本ゼミのゼミ見学でめちゃめちゃ興味を引かれ、絶対ここに行きたいと思って頑張って面接を受けたという感じですよ。

斎藤：ありがとうございます。私が北大生だった頃、経済学部って「ひま経」って言われていましたよね。

平本：ええ、ひま経と言われていました。

斎藤：ですから、こんな優秀な方が出てくるというのはすごくびっくりして。私の知り合いが経済学部にあったのですが、そんなに優秀じゃなかったですよ。

平本：そうですね。21世紀になって、世の中が変わったことによって経済学部の人気が高まったのではないのでしょうか。(笑)

斎藤：びっくりしました。さっき桜木さんともしゃべっていたのです。

桜木：しっかりしてますね。びっくりしちゃいました。

斎藤：われわれ何てだらだらしゃべったのだろうみたいな。筋立てて話されていて。

桜木：私は、何をしゃべったか今もう覚えてないです。(笑)

平本：ほかに、何かお互いにご質問、あるいは、ここのところはすごくいいお話だったとか、そういうコメントでも構わないです。

桜木：保田さん、しっかりしていると言われることが多いでしょう。

保田：平本先生は私のことをいろいろ知っていると思うのですが、実際はけっこう抜けていて、私が今日資料を作ったのも資料がないと話が抜けそうなので、あえて用意しました。お二人のようにその場で柔軟に対応できる力、すてきだなと逆に思って聞いていました。

平本：卒業してから、この16年ぐらいで非常に成長したなと思います。

保田さんのほうから、何かありますか。

保田：質問というより、それぞれお二方のお話に出ていた共感軸のところ。まず桜木さんのお話で、言葉どおりではないと思うのですが、自分の価値基準を認められるのは年を重ねてからみたいなお話が出てきて、私これはすごく共感しています。私も、道半ばではありますが、10代から20代前半は自分に自信が全くない時期だったのです。それもあって、いろいろ模索して今に至ったところがあります。さっきお話ししましたが、ジョブホッパーと言われたり、北大を出てから何でアパレルなのかとか、いろいろな意見に日々揺れ動いていたものが、今やっという場をお借りして少し自分のことを言えるようになったのも、お話ししてきた変遷の賜物だなと思います。年を重ねてからという部分はすごく共感しました。

斎藤さんのお話は、複数の拠点とか重層的なお仕事のされ方を経て今に至っているという、その歩まれ方に対して、私もそういうふう昇華していきたいなと思いました。

質問というより感想になるのですが、そんなことを感じながらうかがっておりました。

桜木：お話に出ていたブックカフェに桜木紫乃の本を置いてください。よろしく。(笑)

平本：ありがとうございます。

次に、お三方のお話を伺っていて幾つか共通点があったのは、例えば歩さんと保田さんは、点を結びつけていくと物語になるとか面になるというようなお話をされました。あるいは、桜木さんのお話で、北海道と内地の当たり前は全然違うし、自分が住んでいる、ないしは生まれた土地の当たり前をきちんと肯定していく生き方、暮らし方というか、それがとても重要なのだというお話。そこら辺は今日のテーマを探る上で大事なところだと思うのです。

それで、保田さんも歩さんもいろいろなところで働いてこられて、仕事があるところで働く

のか、働くところに仕事があるのかという問題はけっこう重要だと思うのです。例えば北海道に戻ってきたくても、仕事がないと働けないし、歩さんは北海道に仕事をつくってくれる方がいらっしゃったから2016年に戻ってこれたとおっしゃいました。保田さんは、最後は東京のICMGという企業に勤めていて、そこからフリーになってUターンしたということだったのですが、働く場所に仕事がある、ないしは仕事がある場所で働くというような観点で、戻ってきたいけど仕事がないとか、逆に、仕事については少し妥協してもいいから戻ってきたいとか、そういうようなことが多分人生のフェーズの中でいろいろあると思うのですけれども、何かそういう点についてコメントいただければと思います。

歩さん、保田さんの順でお願いできますでしょうか。

斎藤：先ほどお話ししたように、大学を出た時は仕事なんてなかったのですが、ここで私がやることを仕事にしていこうと随分四苦八苦しました。そうこうして何とか仕事になりましたのですが、さらに仕事にするにはということで東京に行きました。それが、20年ぐらいたって戻ってきた時に、割とこの仕事で立派に成長していたということはあるのじゃないかと思っています。

平本：それは、北海道の演劇環境が熟成したからということなのですか。

斎藤：そうですね。20年ぐらい時間がかかったと思うのですが、数十年前は私ぐらしか演劇で食べている人間がいなかった。でも、帰ってきてみると、私より下の世代が複数名もう食べているというふうになっている。さらに10年後はもうちょっと増えているのじゃないかという。本当に少しずつなのですけれど。ただ、あの時に何とかここで食っていくのだと騒いではなかったらこうなっていなかったのじゃないかというのはあって。やはり時間のかかることでもあるし、一人じゃ仕事はできないので。特

に演劇は、空間を共有する仕事なんですよ。

例えば桜木さんが物を書くと、出版されて、翻訳をされれば、世界中に作品が飛んでいくじゃないですか。

桜木：そうですね。

斎藤：でも、私たちの仕事って手の届くところにしか伝えられないのです。映画とか、映像表現は別です。ただ、私がメインにしている演劇というのは、そこにいる人としか一緒にできない仕事なので、そのスピードはすごく遅かったのじゃないかと思います。ほかの仕事だと、もっといろいろな可能性があるのじゃないかと思うのですけれど。

札幌は漫画家の方も随分いらっしゃって、私の知っている方もこっちで書いていて、もう世界中に進出している人とかいらっしゃいます。仕事にもよるのじゃないかと思います。

平本：おっしゃるとおりです。作家と演劇、舞台上で演じる方では全然違いますし、コンサルタントもまた違いますよね。ですから、その仕事による部分というのでしょうか、作家だったら逆にリモートによって取材の時間が長くなってしまった、というお話がありましたね。

保田さん、桜木さんの順番でお話しいたいでよろしいでしょうか。

保田：もし本筋とそれていたら申し訳ないのですが、さっきのお答えとして、私は北海道に帰ってきた時は明確に仕事が決まって戻ってきたわけではなかったのです。というより、実は決まりかけていた仕事があって戻ってくることを決めたのですが、移るちょっと前に破談になって、どうしようともがきました。

ただ、友達とか含め、Uターンしたいのですが仕事をどうしようみたいな相談を受ける中で答えていることは、この仕事しかもう自分の天職はないと思うのでしたら、行く先でそう思う仕事がないと難しくなってしまう。どんな仕事でも仕事をしている中で次の自分の興味が広がっていくのではないですかとお伝えするようにしています。なので、移りたいのだった

ら、転職先がちょっと思っているのと違う仕事だとしても、やってみたらいいと私は思っています。妥協して向き合うという意味ではなくて、出会った仕事に対して、そこから何を得ようとするのかというのは業種を問わず自分次第だと思っていますし、一見ちょっと寄り道のように見えたその仕事からまた次の仕事に転職する時は、もしかしたらもともと描いていた道に戻れるかもしれないというのが実はあるので、仕事に対して悩んでいるから、仕事がないから移れないというのは一回横に置いて、ちょっと移ってみたらということをやっているようにしています。答えになっていますか。

平本：ありがとうございます。

桜木さんいかがでしょう。どこにいてもできるように一見思える仕事ですが。

桜木：そうなんですよ。今改めて考えたら、私どこにいたって原稿を書けるのに、何でここにいるのだろかと思っています。

私実は直木賞というのをいただいたことがございまして。

斎藤：知ってます。

桜木：知ってます？

平本：多分、全員ご存じだと思います。(笑)

桜木：あの時、次の受賞者が出るまでは私は何とかこの「直木賞」という活字をあちこちに出さなきゃいけないという使命感があって、次の受賞者が出るまで半年ぐらい大層忙しかったのです。その時に、1週間のうち、3日東京にいて(東京には3日いるのが限界だったのです)、2日帰ってきて原稿を書いて、また2日東京に行くというような暮らしをしていたのです。すごく短い間だったのですが、すごく疲れちゃって。

それで、どこでも書けるのになぜここ北海道にいるのか。それは一番仕事が進むのが自分の家だったからです。自分の家には家族がいて、私が忙しかろうが疲れていようが弁当を要求する子供がいて。その中で毎日出勤するように物語の中に入っていくのです。毎朝毎朝出勤する

ようにして昭和50年代に行ったりきたりするのですが、それをずっとやっていると多分私、気がおかしくなると思うのです。それを引き止めてくれるのが家族だったりするわけで、家事と家族がぎりぎり私を人間に保ってくれていたなと思います。

今は大分楽になりました。

平本：なるほど。ありがとうございます。

まさにそれは作家業のある種の特性なのでしょう。

桜木：いろんな方がいます。いつもスマホで原稿を書いているという人もいれば、一番びくつきしたのは、山手線に1日中ぐるぐるぐるぐる乗り続けて1本書いたという人。そういう人もいますよ、本当に。だから、作家って一言で言えない。みんなそれぞれの仕事のやり方があります。

平本：ありがとうございます。

斎藤：あと、ちょっといいですか。

平本：どうぞ、お願いします。

斎藤：純度の高い仕事と言うのが正しいのかどうか分かりませんが、演劇を作る場合、東京で作るといろんな大人の事情に取り巻かれていくのです。稽古場を維持するだけで、物凄く不動産価格も高いものですから物凄く資金が必要だったり、スケジュールに合わせて劇場も物凄く先まで押さえないとダメとか、凄く狭い稽古場で凄く大勢の人数で何とか作らなきゃいけないとか、いろいろなことをクリアしないとなかなか作れないのです。北海道の場合そういうことが少なく、純粋に作品に向かえるということはよく言われています。

映像と違って、演劇作品の場合、その作品の本質に稽古場でちゃんと向かいやすいのは私の場合札幌の稽古場なのです。ですから、東京で芝居に参加したことはありますが、私が自分で台本を書いて演出して東京で作ったことは実は1回しかないのです。あとは全部北海道へ帰ってきて作っています。2016年にこっちに帰ってきてから増えている仕事が、東京で十何年も

一緒に仕事をしてきた面白い俳優たちを札幌に呼んで新作を作るということを最近やっています。今年も9月に、桜木さんにも見ていただいたのですが、私以外全員東京の演出家とスタッフと俳優という芝居を札幌で作って、札幌で初演したものを東京で公演するというのがそろそろ始まっています。

あと、これは紹介してもしょうがないのですが、一人知り合いになかなかいい役者だったのですが、東京でほとんど仕事がなくなってしまったのがいて。そいつが悪いんですけども、でも、いい役者なんです。そいつが、私がこういう仕事をしているというので奥さんを連れて札幌に引っ越してきちゃって、今、札幌で演劇をずっとやっています。北海道に来てからそいつは物凄く忙しくなっているんです。

ですから、UターンだったりIターンだったり、ほんとに純度の高い仕事、演劇にとって純度というのかな、ちょっと言葉は難しいのですが、そういう仕事をしやすい環境というのは今、札幌のほうがあるんじゃないかと思うのです。東京でそれを維持するためには、いろいろ大変なことが多い。

桜木：例えば。

斎藤：ですから、相当お金を集めなきゃいけないんです。お金を得るために、いろんなビジネスをしなきゃいけない。それで、いろんなインタビューも受けてたりとか、何かを映す時に必ずここに何かを背負わなければいけないとか、せりふにこの食品名を入れなきゃいけないとか、いろいろあるのです。それは、面白がってられないんですよ。

桜木：やらなければいけないということになるのですね。

斎藤：それをやらなければ成立しないというのがどうしてもあるのです。

平本：ありがとうございます。

純度というのは、なるほどと思いました。研究者の話なんて皆さん聞きたいかどうか分かりませんが、東京の大学に勤めている研究者と北

大に勤めている私のような研究者とで、そこら辺が違うのです。東京にいますと、やはり最先端の研究を追いかけていかなければいけないし、研究会も頻繁にあるし、海外の有名な先生もしょっちゅう招聘教員でいらっしゃるし、そういう研究グループに巻き込まれて新しい研究の一部をいわば下請的に担っていかねばならないし。北海道にいますとそういうしがらみがないので、好きなことをテーマにして好きなようにやって、そのかわり学会で評価されるかどうか分からないですが、逆にノイズが少ない分、自分が本当にやりたいと思う研究に打ち込めるといのは今の歩さんのお話にちょっと似ているのかなと思いました。

斎藤：事の本質にしっかり向き合えるという。その学問、社会科学にしても自然科学にしても、北大というのはそういうことをやってきたのじゃないかと私は勝手にイメージをしています。同じ地球物理学でも、東大の地球物理学が多分最先端の研究を行っている時に北大は何をやっていたかという、細かい岩石をちゃんと積み上げて、試料をたくさん作って、毎年何トンも捨てなきゃいけないぐらい拾ってきて薄片を作っていたという話があったりとか、社会の役に立たないかもしれないことをちゃんとやれるということですね。でも、補助金を得ようとするとか、お金をちゃんともらおうとすると社会の役に立つことばかり求められるのですよね。

平本：すごくそれは重要なポイントだと思います。

斎藤：演劇なんていうのは絶対社会に役立ちゃいけないと思うのです。コロナになって、不要不急とか言われたものですから、今大変なんです。じゃあ必要必急な演劇を作るためにどうしたらいいかという。そうすると札幌市とか北海道もお金を出しやすい。みんなそれを真剣に考え始めているのですが、違うだろうと思うのです。

何か社会の役に立てようと思って小説書きま

すか。書かないですよ。売りたいとは思っているんですけど。

桜木：いや。売れると担当が喜ぶなとは思いますが。あと、生活もちょっと楽になるんですけど、そんなに大事は狙っていないです。

というのは、小説の映画化でも、大規模な映画、全国 200 館で公開とか、そういうのっていろんな制約があってなかなか話が進まない。ですから、全国 80 館ぐらいの公開規模でいいのじゃないかなって。

斎藤：それだって大きいですよ。

桜木：大きいですか。規模を見直すと話が早いですよね。なぜかという、監督が好きに作れるから。損得をあまりつきつめて考えると、何か見失っちゃいそうで怖い。そこに何か北海道性を感じるんですね。お金のことは大切だと分かっちゃいるのですが。

平本：なるほど。

斎藤：何か好きなことというか、純度の高いというか。平本先生の話からそうなのですけど、それが、例えば学問でいうと基礎研究の部分だと思うのです。それがあからこそ、その先の、ステップに進める。まあ誰かの役に立てるのかもしれないですけど、基礎研究なしにはそこに行けないのではないかと。

演劇なんかもそうなのじゃないか。それに向かえるのは、東京よりも私は北海道なんです。

平本：なるほど。ありがとうございます。

保田さん、どうですか。役に立たないことをやっているお二人がこういうふうにおっしゃっていますけれども。

保田：とんでもないです。

東京でも、札幌でもコンサルをやっているのは、札幌に来てからのほうが仕事の幅が広がったということです。それは、もちろんフリーになったということもあるのですが、自分の仕事のパフォーマンスが札幌に来てからのほうが正直上がったなと思っていますし、北海道ならではの仕事に出会えるようになったりしました。

先ほど pool という本屋さん (café) の説明をしましたが、多分、東京でコンサルとして働いていたらああいう仕事はもらえなかったと思うのです。経営者との議論だなんだみたいな話に集約されてしまうのですが、逆に北海道だと東京でビジネスをやっているフリーランスで戻ってきた人がそう多くない部分もあるので割と札幌の幅広い職種の人からご相談をいただいたりして、仕事の幅も広がってきましたし、やはりゆったりとした環境で仕事ができるという意味で自分自身の効率も上がり、札幌に戻って来てよかったなというところです。

かつ、北海道というか、特に札幌になると、斎藤さんのお話にもあったように、下手に東京に住んでいろいろ移動するより、家でがつつりリモートで仕事をしながら必要に応じて10日間とか缶詰の出張ベースで東京に行って、みっちりミーティングして戻るといほうが効率もいいですし、濃い打合せができたりするのでビジネスの観点でもけっこういいところ取りできるんじゃないかと、仕事の種類を問わず思うことは多いです。

平本：はい。ありがとうございます。

そうなのですね。先ほど歩さんもおっしゃった、リモートでできる仕事だったらそういういいところ取りが成立するのですが、舞台・演劇なんかになるとそれができないという面があるのですが、一方で、時代はリモートだなんだというふうになっています。演劇界で、そういうような方向に対しての何か新しいイノベーションなどは模索されているのですか。

斎藤：私はすごく今回のコロナ禍で、こういうことも試さなきゃいけないんじゃないとか、配信ということにみんなが随分トライしたりしてきました。じゃないと、もう手も足も出なかったですから。あと、リモートならではの、例えば zoom の画面がいっぱいあるところで作れる演劇みたいなことを試した人はいました。ただ、それできっちりとチケットが売れて収益が上がったという話は実は一つも聞いていない

です。ですから、やはりお客さんが目の前にいないとどうにもならないビジネスなのだと改めて思います。

リモートでやっているものを皆さんが配信で見るといふ、それは映像なんです。私は映画の仕事もやっているので、映像作品をお客に提供するためには物凄い準備と物凄い技術が必要で、あと仕上げにも物凄く時間とお金をかけるのです。それで映画館などで見ていただく作品を作っているの、それは映像作家の仕事なのです。それを、舞台をやっている人間がちょっと撮って、ちょちょっとまとめて、ちょちょっと出してもお客さんに提供できるクオリティのものになるわけがないというのは私が当初から言っていたことで、私の場合は緊急避難的に使っただけです。

平本：なるほど。今のお話を大学の現場に当てはめると、いわゆるオンライン授業なんていうのはけしからんということになりますね。何故かという、映像も素人で、しゃべりも素人の大学教授が小さなカメラに向かってぼそぼそと授業をやって、それを90分間おまえら聞けと。それでは学生は不満を感じるし、ある東京の大学では授業料返還訴訟も起こっていますけれども、そういうことになるのは当たり前だなと。

オンライン授業というのは、可能性はもちろんあるのですが、いいかげんに作ったものは駄目なのと、あと、しゃべる立場からいうと、今対面で150人ぐらいの学部を授業をやっていますが、やっぱり反応が分からないとなかなか対応できないという部分はありますね。それは演劇と少し通ずる部分があるのかなと思ってお話を伺いました。

残り15分ぐらいになりました。今日はオンラインで道外の方にも随分ご参加いただいているので、北海道で暮らして働くということに関してのメリットについては今までたくさんお話しいただきましたが、逆に課題というか、こういう点はまだ少し足りない部分があるのじゃないか、こんなところがよくなるともっとよくな

るのじゃないかということ。もちろん、桜木さんのように不満はあまりないのだというのは、それはそれでオーケーだと思いますし、その場合もっとここがこうなるともっとよくなるのだけどということでもいいと思うのです。道外の方が北海道に来ていただけるように、こうなったらもっとよくなるというようなこと、あるいは現状で少し問題がある点などがあればお話しいただきたいと思います。

桜木さんからいいですか。

桜木：北海道にどうやったら人が来てくれるか。

平本：ええ。ないしは、北海道で暮らして働くことは、現状で満足なのですが、ここら辺が足りていないとか。

桜木：あのですね、北海道の出版社はもうちょっと頑張ったらいいいと思います。「ひとり出版社」というのが全国に今できています。それで、いろんなスキルを持った人が編集長であり社長だったり、そういうことを「ひとり出版社」はやっていて、本は、はっきり言うと一人でも作れます。書いて、それを校閲、編集して印刷、で、販路があれば。

それが、今、北海道発信で北海道の絵本というのも作ってみましたけれども、その販路をあくまでも東京中心で考えるからいけないと思うのです。あそこは土地が高くて、自分の本を面で平置きにしてもらう時に、「おまえ、土地代幾らだと思っているんだ」って私すごまれたことがあるんですけど、今いろんな売り方があるし、いろんな宣伝の仕方があります。

それで、私も今模索中ですけども、さっきもおっしゃっていたように面で繋がって北海道から全国に発信できるものを、ちゃんとしたレベルに持っていかなければいけないと思うのです。

ですから、全国の方、北海道でも仕事はできますし、どうぞ北海道で出版社を開いてください。

平本：はい。ありがとうございます。

出版社の創業を考えている方、ぜひ北海道においでください。

では、歩さん、お願いいたします。

斎藤：やっぱり北海道は移民の土地なんですよ。私も、父方でいうと3世なのです。祖父が丁稚で札幌の商家に入って、その家の人がちゃんと学校を出してくれて、それで、祖母と出会って父親が生まれました。母方も4世なんです。まだ若いですよ。

この間、イベントの関係で栗山の取材を随分しましたら、あちこちで夕張の話も出てきました。よそ者が、一攫千金を狙った人もいるのでしょうけれども、いろんな人がやってきてこの土地をつくったということは実はいまだに変わっていないのではないかと考えています。なのに、北海道で生まれ育って、ここでこの仕事をしている人は、なぜか自信に満ちているんですよ。「すごいべや、北海道は」「何がよ」「北海道すごいべ」、もう自慢するんです。よそへ行ってみてごらん、確かに自慢できる素材はあるけれど、もっと仕事のスキルを上げないと勝負できないよということをもっと知ったほうがいいんじゃないかと思うのです。そういう点でちょっとのんびりし過ぎている部分はあるのですが、そのおおらかさが魅力であるというのは言えると思います。しかし、例えばドラマを撮る、映画を撮るということになっても、北海道にだけいたからか、経験がないからか人材が育っていない。それで、演劇を作ろう、作品を作ろうとすると、それだけのスキルを持った俳優がまだそうはいない。それで、やはりよそから呼んでこなさなければいけないという現状があるので、東京ほど才能は集まっていないと言えます。経験が足りないからなのだと思うので、今後粘り強く続けていって経験を増やしていけば、もっとすばらしいものができる。まだ途上ではないかという気がします。

平本：なるほど。ありがとうございます。

北海道はものづくりが弱いと言われていて、自動車の部品メーカーは幾つかありますが、完

成車両は作っていないのです。それとちょっと似ている部分があるのかと思いながらお話を伺いました。

保田さん、いかがでしょうか。

保田：今の斎藤さんのお話に近いかもしれないのですが、私は、開かれたコミュニティの数と濃度を濃くしていかないといけないのではないかと考えています。物理的な人数もありますが、東京には、ここに行けばいろいろな面白い人と会えるみたいな場所がけっこうあるのです。北海道は、あまりまだぱっと思いつかないなというのは正直あって、面白いことをしている人や考えている人は絶対たくさんいるのに、東になっていないというか、東になっているとしたら、ほんとに北海道の人で閉じてしまっているというか、そこがもったいないなとすごく思っています。

ですので、あまり垣根なく、北海道自体に興味を持っている人は絶対たくさんいるので開かれたコミュニティをどんどんつくっていく。それは、北海道の人が主になってもいいし、外の人が北海道でそういうことをやろうとしていたら、そこに北海道の人も乗かってほしいなというのはあります。

平本：なるほど。それはいいコメントかと思います。どうもありがとうございました。

もう時間がなくなりましたが、せっかくですので、フロアのみなさまで今日のパネリストお三方に何かお尋ねしたいことがあれば、お一人、お二人。いかがでしょうか。手を挙げていただければ。

作間先生、お願いします。

作間：今日は、とても刺激になるお話をいただきました。ありがとうございます。

一つ質問させていただくとするならば、私も学生時代東京で過ごし、札幌に帰ってきたという立場ですが、現状に満足しながら、でもどこかで、やはり経済あるいは政治の中心であり、あるいは文化的にも札幌よりも規模の大きい東京というものを向こうに見た時に、自分

の中の職業人としての例えばスキルが札幌にしていると取り残されてしまうのではないかと、成長していないのではないかとという焦燥感、あるいは恐怖のようなものを感じることがないわけではありません。

今日のパネリストの先生方は、その辺をどのように感じになるのか。あるいは、それは感じる必要がないことなのか。その辺をお聞きたいと思います。

平本：ありがとうございます。

東京という都会に対して、取り残されてしまう可能性というか焦燥感のようなことについて一言ずつ。

では、桜木さんからお願いできますか。

桜木：ありません。取り残されるとしたら向こうだと思ってやっています。「ついてこいよ」みたいな気持ちです。(笑)

平本：力強いお答え、ありがとうございます。

歩さん、お願いします。

斎藤：私、北海道に帰ってきて最初に北海道新聞を読んだ時、大丈夫なんだろうかと思ったんです。こんな話ばかりでって。しかし、住んでいたら、もうこれでいいんですよね。ただ、私は十何年も東京に行っているからこういうことが言えるのかもしれませんが。ですから、ちゃんと外も知っておいたほうがいいのじゃないかということを私は札幌の演劇人には言っています。

平本：ありがとうございます。

保田さん、どうですか。

保田：私も、まさに今同じ悩みを抱えていました。別に札幌に住んでいるから取り残されるわけではなくて、そのマインドが自分の中から消えた時に取り残される可能性があると思っているので、今のご発言にあるように、焦っているとおっしゃっている時点で多分取り残されてはなくて、札幌にいながらいくらでも人や情報にリーチしていけば、札幌に住むことで取り残されることではないという感覚です。

平本：ありがとうございます。

一度外を経験したほうが良いというのは事実だと思うのです。

桜木さんは北海道からお出になったことがないとおっしゃいましたけれども。

桜木：私の場合は、ここから出なくても出来る仕事をしているというだけなのですね。

平本：もちろんです。

私は、北海道の学生さんには、どのタイミングで越えるかは別として、1回は津軽海峡を越えなさいとは言っています。1回外を見ると、良さも悪さも含めて北海道を相対化できるのではないかとと思っています。

もう一方ぐらいいかがでしょうか。ございませんか。

なければ、オンラインでお一人ご質問されている方がいらっしやまして、これは保田さんへのご質問なのですけれども、先ほど東京の仕事が7割ぐらいいだとおっしゃっていましたが、札幌から東京の仕事はどうやって探していますか。もし札幌ではなく北海道のより地方の町や村住まいだった場合に、仕事面でどのような違いが生じるでしょうか。例えば札幌のブックカフェには立ち寄れないよねというご質問なのですけれども、いかがでしょうか。

保田：個人の話でいくと、東京の時の知り合い経由でけっこう仕事の相談などが来ているので、東京の仕事の中でそういう探し方、出会い方が多いですし、東京で一つ二つ仕事をつかまえた時に、そこから派生して知り合った方経由でまた仕事のお話をいただいたりというような、自分で営業をかけてというよりは、出会ったり取り組んだりした中で連鎖してということが個人的には多いということです。

札幌とほかの都市との違いというところでは、先ほどの効率性の話もあるのですが、どうしても東京にしながら東京の中の移動で時間を取られてしまうような話と一緒に、やはり東京を含めいろんなところに行脚するのに、リモートでわざわざ北海道に住んだのに結局いろんな移動とか含めて効率を削がれているようなこと

はあったかと思いますが、それは職種によるのではないかと思います。

平本：はい。ありがとうございます。

もう一方だけオンラインで。99年工学部卒業の北大OBの方なのですけれども、現在埼玉にお住まいで、埼玉県に両親がいらっしゃる。それから東京にも自宅があるので、北海道に移住することはハードルが高い。でも憧れの札幌への移住を果たすためにはどうすればいいのか、コメントがあればいただきたいというご質問です。

なかなかこれは難しい質問なのですけれども、どなたかお答えくださる方いらっしゃいますか。

斎藤：札幌のことはご存じですね。北大にいらしたら。

平本：恐らくそうだと思います。

斎藤：そんなに憧れているのなら、やってみたらいいのじゃないかというぐらいいしか言えないですけれども。

平本：桜木さんも、そうですか。

桜木：それこそ、そこに行って仕事を探すのか、そこに仕事があるから行くのか。やりたいことがここにあればよいのでは。どちらが先なのでしょうね。

平本：そこですね。

桜木：北海道に行きたいのが先にあって、でも、思ったような仕事に就けない。夢破れちゃって、札幌が嫌いになったら困りますよね。

斎藤：そうですね。決め方ですね。

私は、両親は千葉県にいたのですが、結局北海道に来ちゃったんですよね。でも、向こうで不動産を買っちゃったんです。そうすると、向こうを売却すると、こっちでかなりのものを買えるんです。こっちに移住できたきっかけは二子玉川でちゃんと不動産を買っていて、そしてそれを売ってみたら高くなってびっくりしたんですよ。

桜木：そうなんだ。

斎藤：そうなんです。それがあったことも決

意できたことの一つで、あっちで売れたものでこっちでものを買うと、お釣りどころか全然違うんです。物価がね。思い切れば、多分こっちのほうがいろいろな意味でお釣りが来る可能性はあるのじゃないかという気がします。

平本：そうですね。ありがとうございます。

保田さん、コメントありますか。

保田：多分、ご家族などのことを含めて一気にゼロから100に来る覚悟を持てれば一番いいですが、持てなかったら単身赴任とか、お仕事で出張の機会を増やすとか、何でもいいので、まず札幌に具体的に来る機会を頑張って増やして、やっぱり札幌がいいというマインドがいろんなハードルより高くなったら移住するというステップを踏むのはどうでしょうか。

平本：はい。ありがとうございます。すばらしい。

斎藤：正しい答えです。

平本：ちなみに、オンラインでは参加者の方から、やらない理由よりも、やる理由を探したほ

うがいいのではないのでしょうか、今、歩さんがおっしゃったのと同じように、札幌以外の土地もありますよ、もっと札幌より物価が安いところ、土地の値段が安いところもありますから、いろいろ選択肢があるのではないのでしょうかというようなアドバイスもいただいております。ご参考になれば何よりだと思います。

私のタイムマネジメントが悪くて時間が9分ほど超過してしまいましたが、これで今日のシンポジウムを閉じさせていただきたいと思います。

会場のみなさま、そしてオンラインでご参加のみなさま、長時間にわたりお付き合いいただきまして、また、ご質問やコメントをいただきましてありがとうございました。

パネリストお三方に非常に面白い、そして中身のあるお話をいただいたことで今日のシンポジウムを大変有意義に閉じることができると思います。

どうもありがとうございました。(拍手)